

トロツコ

芥川龍之介



小田原熱海間に、軽便鉄道敷設の工事が始まったのは、良平の八つの年だった。良平は毎日村外れへ、その工事を見物に行つた。工事を——といったところが、唯トロッコで土を運搬する——それが面白さに見に行つたのである。

トロッコの上には土工が二人、土を積んだ後に佇んでゐる。トロッコは山を下るのだから、人手を借りずに走つて来る。煽るように車台が動いたり、土工の袷の裾がひらついたり、細い線路がしなつたり——良平はそんなけしきを眺めながら、土工になりたいと思う事がある。せめては一度でも土工と一しよに、トロッコへ乗りたいと思う事もある。トロッコは村外れの平地へ来ると、自然と其処に止まつてしまふ。と同時に土工たちは、身軽にトロッコを飛び降りるが早いか、その線路の終点へ車の土をぶちまける。それから今度はトロッコを押し押し、

もと来た山の方へ登り始める。良平はその時乗れないまでも、押す事さえ出来たらと思うのである。

或^{ある}夕方、——それは二月の初旬だった。良平は二つ下の弟や、

弟と同じ年の隣の子供と、トロッコの置いてある村外れへ行った。トロッコは泥だらけになつたまま、薄明るい中に並んでいる。が、その外^{ほか}は何処^{どこ}を見ても、土工たちの姿は見えなかつた。三人の子供は恐る恐る、一番端^{はし}にあるトロッコを押した。トロッコは三人の力が揃^{そろ}うと、突然ごろりと車輪をまわした。良平はこの音にひやりとした。しかし二度目の車輪の音は、もう彼を驚かさなかつた。ごろり、ごろり、——トロッコはそう云う音と共に、三人の手に押されながら、そろそろ線路を登つて行つた。

その内^{けん}にかれこれ十間程来ると、線路の勾配^{こうばい}が急になり出し

た。トロッコも三人の力では、いくら押ししても動かなくなつた。どうかすれば車と一しよに、押し戻されそうにもなる事がある。良平はもう好よいと思つたから、年下の二人に合図をした。

「さあ、乗ろう！」

彼等は一度に手をはなすと、トロッコの上へ飛び乗つた。トロッコは最初徐おもむろに、それから見る見る勢いきおいよく、一息に線路を下り出した。その途端につき当りの風景は、忽たちまち両側へ分かれるように、ずんずん目の前へ展開して来る。顔に当る薄暮はくぼの風、足の下に躍おどるトロッコの動揺、——良平は殆ど有頂天ほんてんになつた。しかしトロッコは二三分のちの後、もうもとの終点に止まつていた。

「さあ、もう一度押すじゃあ」

良平は年下の二人と一しよに、又トロッコを押し上げにかかつ

た。が、まだ車輪も動かない内に、突然彼等の後には、誰かの足音が聞え出した。のみならずそれは聞え出したと思うと、急にこう云う怒鳴り声に変わった。

「この野郎！ 誰に断つてトロに触つた？」

其処には古い印裨天しるしぼんでんに、季節外れの麦藁帽むぎわらぼうをかぶつた、背の高い土工が佇んでいる。——そう云う姿が目にはいつた時、良平は年下の二人と一しよに、もう五六間逃げ出していた。——

それぎり良平は使の帰りに、人気のない工事場のトロッコを見ても、二度と乗って見ようと思つた事はない。唯その時の土工の姿は、今でも良平の頭の何処かに、はつきりした記憶を残している。薄明りの中に仄ほのめいた、小さい黄色の麦藁帽、——しかしその記憶さえも、年毎としごとに色彩は薄れるらしい。

その後十日余りたつてから、良平は又たつた一人、午過ぎひるの

工事に佇みながら、トロッコの来るのを眺めていた。すると土を積んだトロッコの外ほかに、枕木まくらぎを積んだトロッコが一輛りょう、これは本線になる筈はずの、太い線路を登つて来た。このトロッコを押しているのは、二人とも若い男だった。良平は彼等を見た時から、何だか親しみ易やすいような気がした。「この人たちならば叱しかられない」——彼はそう思いながら、トロッコの側そばへ駈かけて行つた。

「おじさん。押してやろうか？」

その中の一人、——縞しまのシャツを着ている男は、俯うつむ向きにトロッコを押したまま、思った通り快い返事をした。

「おお、押してくよう、」

良平は二人の間にはいると、力一杯押し始めた。

「われは中なか中なか力があるな」

他の一人、——耳に巻煙草を挟んだ男も、こう良平を褒めてくれた。

その内に線路の勾配は、だんだん楽になり始めた。「もう押さなくとも好い」——良平は今にも云われるかと内心気がかりでならなかつた。が、若い二人の土工は、前よりも腰を起したぎり、黙々と車を押し続けていた。良平はとうとうこらえ切れずに、怯ず怯ずこんな事を尋ねて見た。

「何時までも押ししていて好い？」

「好いとも」

二人は同時に返事をした。良平は「優しい人たちだ」と思った。

五六町余り押し続けたら、線路はもう一度急勾配になった。其処には両側の蜜柑畑に、黄色い実がいくつも日を受けている。

「登り路みちの方が好い、何時いつまでも押させてくれるから」——良平はそんな事を考えながら、全身でトロッコを押すようにした。蜜柑畑の間を登りつめると、急に線路は下りくだになった。縞のシャツを着ている男は、良平に「やい、乗れ」と云った。良平は直すに飛び乗った。トロッコは三人が乗り移ると同時に、蜜柑畑の勻おおいを煽あおりながら、ひたすべ込りに線路を走り出した。「押すよりも乗る方がずっと好い」——良平は羽織に風を孕はらませながら、当り前の事を考えた。「行きに押す所が多ければ、帰りに又乗る所が多い」——そうもまた考えたりした。

竹藪たけやぶのある所へ来ると、トロッコは静かに走るのを止やめた。三人は又前のように、重いトロッコを押し始めた。竹藪は何時か雑木林になった。爪先上りつまさきの所所ところどころには、赤錆あかさびの線路も見えない程、落葉のたまっている場所もあった。その路をやつと登り

切ったら、今度は高い崖がけの向うに、広広と薄ら寒い海が開けた。と同時に良平の頭には、余り遠く来過ぎた事が、急にはつきりと感じられた。

三人は又トロッコへ乗った。車は海を右にしながら、雑木の枝の下を走って行つた。しかし良平はさつきのように、面白い気もちにはなれなかつた。「もう帰つてくれれば好いい——彼はそうも念じて見た。が、行く所まで行きつかなければ、トロッコも彼等も帰れない事は、勿論もちろん彼にもわかり切つていた。

その次に車の止まつたのは、切崩きりくずした山を背負つている、藁屋根の茶店の前だつた。二人の土工はその店へはいると、乳呑児ちのみごをおぶつた上かみさんを相手に、悠悠ゆうゆうと茶などを飲み始めた。良平は独ひとりいらいらしながら、トロッコのまわりをまわつて見た。トロッコには頑丈がんじょうな車台の板に、跳はねかえつた泥が乾かわいていた。

少時しばらくの後のち茶店を出て来しなに、巻煙草を耳みみに挟はさんだ男は、（その時はもう挟んでいなかっただが）トロッコの側そばにいる良平に新聞紙に包つつんだ駄菓子だかしをくれた。良平は冷淡れんたんに「難有ありがとう」と云つた。が、直すぐに冷淡れんたんにしては、相手にすまないといい直した。彼はその冷淡れんたんさを取り繕つくろうように、包み菓子の一つを口へ入れた。菓子には新聞紙にあつたらしい、石油の匂におがしみついていた。

三人はトロッコを押しながら緩ゆるい傾斜けいさを登のぼつて行つた。良平は車くるまに手をかけていても、心こころは外ほかの事を考かんえていた。

その坂さかを向むうへ下くだり切きると、又また同じおなじような茶店ちあんでんがあつた。土工こうじたちがその中なかへはいつた後あと、良平はトロッコに腰こしをかけながら、帰かへる事ことばかり気きにしていた。茶店ちあんでんの前まへには花はなのさいた梅うめに、西日せいじつの光ひかりが消きえかかっている。「もう日ひが暮くれる」——彼はそう考かんえると、ぼんやり腰こしかけてもいられなかつた。トロッコトロッコの車くるま

輪を蹴けつて見たり、一人では動かないのを承知しながらうんそれを押して見たり、——そんな事に気もちを紛まらせていた。ところが土工たちは出て来ると、車の上の枕木まくらぎに手をかけながら、無造作むぞうさに彼にこう云った。

「われはもう帰んな。おれたちは今日は向う泊りだから」
「あんまり帰りが遅くなるとわれの家うちでも心配するぞら、」

良平は一瞬間あっけ呆気にとられた。もうかれこれ暗くなる事、去年の暮母と岩村まで来たが、今日の途みちはその三四倍ある事、それを今からたつた一人、歩いて帰らなければならぬ事、——そう云う事が一時にわかつたのである。良平は殆ど泣きそうになつた。が、泣いても仕方がないと思つた。泣いている場合ではないと思つた。彼は若い二人の土工に、取つて附けたような御時宜おじぎをすると、どんどん線路伝いに走り出した。

良平は少時しばらく無我夢中に線路の側を走り続けた。その内に懐ふところの菓子包みが、邪魔になる事に気がついたから、それを路側みちばたへ抛ほり出す次手ついでに、板草履いたぞうりも其処へ脱ぎ捨ててしまった。すると薄い足袋たびの裏へじかに小石が食いこんだが、足だけは遙はるかに軽くなつた。彼は左に海を感じながら、急な坂路さかみちを駈かけ登つた。時涙がこみ上げて来ると、自然に顔が歪ゆがんで来る。——それは無理に我慢しても、鼻だけは絶えずくうくう鳴つた。

竹藪の側を駈け抜けると、夕焼けのした日金山ひがねやまの空も、もう火照ほてりが消えかかつていた。良平は、愈いよいよ気が気でなかつた。往ゆきと返かえりと変るせいも、景色の違ちがうのも不安だつた。すると今度は着物までも、汗の濡ぬれ通つたのが気になつたから、やはり必死に駈け続けたなり、羽織みらぼたを路側みちばたへ脱いで捨てた。

蜜柑畑へ来る頃には、あたりは暗くなる一方だつた。「命さえ

助かれば——」良平はそう思いながら、すべ 込つてもつまずいても走つて行つた。

やつと遠い夕闇ゆうやみの中に、村外れの工事場が見えた時、良平は一思いに泣きたくなつた。しかしその時もべそはかいたが、とうとう泣かずに駈け続けた。

彼の村へはいつて見ると、もう両側の家家には、電燈の光がさし合つていた。良平はその電燈の光に、頭から汗の湯気ゆげの立つのが、彼自身にもはつきりわかつた。井戸端に水を汲くんでいる女衆おんなしゅうや、畑から帰つて来る男衆おとこしゅうは、良平が喘あえぎ喘あえぎ走るのを見ては、「おいどうしたね？」などと声をかけた。が、彼は無言のまま、雑貨屋だの床屋だの、明るい家の前を走り過ぎた。

彼の家の門口かどぐちへ駈けこんだ時、良平はとうとう大声に、わつと泣き出さずにはいられなかつた。その泣き声は彼の周囲まわりへ、

一時に父や母を集まらせた。殊ことに母は何とか云いながら、良平の体を抱かかえるようにした。が、良平は手足をもがきながら、啜すすり上げ啜り上げ泣き続けた。その声が余り激しかったせいか、近所の女衆も三四人、薄暗い門口へ集つて来た。父母は勿論その人たちは、口口に彼の泣く訣わけを尋ねた。しかし彼は何と云われても泣き立てるより外に仕方がなかつた。あの遠い路を駈け通して来た、今までの心細さをふり返ると、いくら大声に泣き続けても、足りない気もちに迫られながら、………

良平は二十六の年、妻子さいしと一しよに東京へ出て来た。今では或雑誌社の二階に、校正の朱筆しゅふでを握っている。が、彼はどうかすると、全然何の理由もないのに、その時の彼を思い出す事がある。全然何の理由もないのに？——塵勞じんろうに疲れた彼の前には今でもやはりその時のように、薄暗い藪や坂のある路が、細細

と一すじ断続している。……

トロッコ

底本：「蜘蛛の糸・杜子春」新潮文庫、新潮社
1968（昭和 43）年 11 月 15 日発行
1984（昭和 59）年 12 月 25 日 38 刷改版
1989（平成元）年 5 月 30 日 46 刷

入力：蔣龍

校正：鈴木厚司

2004 年 10 月 31 日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫
(<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作
にあたったのは、ボランティアの皆さんです。